

Title	記紀神話における男神と女神の性別役割：物事の起源と秩序の形成を巡って
Author(s)	Shchepetunina, Marina
Citation	大阪大学, 2011, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59140
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	シベトウニナ マリーナ Shchepetunina Marina
博士の専攻分野の名称	博士（言語文化学）
学位記番号	第 24848 号
学位授与年月日	平成23年6月30日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学位論文名	記紀神話における男神と女神の性別役割—物事の起源と秩序の形成を巡って—
論文審査委員	(主査) 教授 北村 卓 (副査) 教授 ヨコタ・ジェリー 准教授 ヨコタ村上孝之

論文内容の要旨

本論文では『古事記』・『日本書紀』に記された伝承・物語に見られる男神および女神のイメージを媒介とする男女それぞれに連想されている概念および、神の世界に見られる男神と女神の性別役割を考察する。

研究の主な目的

1. 記紀神話全体において男女それぞれに連想づけられている役割および概念を考察すること。
2. 神話が属する文化記紀神話に反映された男女に関する概念の形成プロセスを追求すること。
3. 男女のイメージを検討しながら、ジェンダー論を神話へ援用する可能性について考察すること。

方向性

本研究ではLevi-Straussによる構造主義的な分析を援用する。その分析方法にある物語を単純化すること、ストーリーの具体性と離れるという点が問題視されており、構造主義的なアプローチは批判されている。それらの問題を避けるために、研究方法としては、フランスの古典文学者および文化人類学者Jean-Pierre Vernantが、Levi-Straussによる構造主義的な分析方法を再考・修正した上、提言した神話分析への三段アプローチを使用する。そのアプローチとは、第一に統合関係的（syntagmatic）、第二に連合関係的（paradigmatic）、第三に概念的な分析から成り、それら三段を最終的に結合させるものである。

さらに、異なった伝承から編集されたテキストへ構造主義的なアプローチを適用する可能性について本論文で考え、そのようなテキストへの援用方法を提案する。

神話分析方法としての構造主義的な分析は、原始住民が詠む神話、「生きている神話」の分析方法として発展した。生きている神話の場合、ストーリーは語られて、始め・頂点・終わりがあり、ある限定したものごとを語り、原始状況（問題設定）および最終状況（問題解決）がある。ストーリーのテーマはこの始め・終わりの対照によって定められる。構造主義的な分析の対象となるのは第一に、一つのストーリー、第二に、一つのストーリーとその異伝、第三に、同じ問題のあるストーリーのグループである。そこで主テーマは同じであり、支配的な内在構造は一つだけ見いだされる。それに対して、書かれた神話の場合は、語られた原型と異なった形で記録されている可能性が高い。つまり、一つのテーマを語る話を幾つかに区切って、または二つ以上の話を統合させ一つのストーリーとして記録される場合もある。神話的思考によって自然的・社会的などの様々で異質とも言える問題がテーマとされていることを考慮すると、書かれた神話に関しては、テーマの設定を問題視する必要があると考える。

本研究を以下の方法で行った。

第一に、一つの物語として編集された『古事記』の上巻を話ごとに分解するにあたって、テキストが取り上げる課題・その解決という連続で区切り、神話が取り上げるテーマを考察する作業をVernantによる分析方法に加えた。こ

ではテーマ範囲を記紀神話における男神と女神の役割を検討することに限定した。

第二に、同じストーリーの異伝、および同様な内容のストーリーの分析および比較を行った。記紀編集は異なった氏族の伝承や断片から形成されているので、ここでは神話全体における構造を見出すことを目的とせずに、同じテーマを語るストーリー間の相関関係を検討する。

第三に、神話に見出される概念を神話が編集された時代から上代へ遡りながら、それをそれぞれの社会的・文化的コンテクストに位置づけることによって、神話が反映する男女に関する概念、その概念と社会の発展との関連を検討する。この段階では神話から文化へという方向を採用した。

本論の要約

第1章から第3章までは、第4章から行うテーマに応じて神話分析のフレームワークを形成し、第4章から第7章まで物事の起源および宇宙と社会の秩序形成を語る話の分析を行った。

まず、第1章で、記紀神話の主役の神における性別の表現について考察を行い、活躍する神々の性別が神の名前や呼称と神の行動で表現され、更に性別を特定できる身体の記事もあると分かった。語彙レベルでは、神名に入る男女それぞれを意味する語彙を確定し、その中で性別だけではなく、明確にジェンダーを表現するものもあった。女神の神名の後に用いられる単独で使われる「ミオヤ」は「母親」のイメージをもつ。それに対し男神の神名に入る「ワケ」は「国の統治者」のイメージを性に押しつける言葉である。叙述レベルでは、性別が体の描写によって、あるいは神が比賣と結婚するというように表現されている。イザナキノ命を除けば、体の描写によって女性の性が表現されている。結婚によって性別が分かるのは男神だけである。叙述レベルでは女性の性は体によって、男神の性は結婚、即ち社会的役割によって表現される傾向がみられる。記紀神話では主役の神の性別が明確に表現され、女性のイメージは身体（「ミオヤ」と身体描写）に、また男性のイメージは社会的活動（「ワケ」と系譜的結婚）に連想づけられていることが観察できた。

第2章では、テキストが取りあげるテーマ、その表現と設定方法の観察を行った。Vladimir ProppとRoland Barthesによる物語の単位を限定する方法を援用し、神話を「・・・が・・・した」という単位、「神話素」に分解し、ストーリーの初め・終わりを確定して、ストーリー毎にテキストが提示するテーマを析出しようとした。「天地開闢」（全ての起源）から初天皇の誕生（最高秩序）まで展開する『古事記』のテーマをまず、「物事の起源」と「秩序の確立」と大別し、前者には、世界観を構成するには主要素である生産タイプとつながると思われる食物の起源と、神の出産の話を考察する。社会様式を説明・弁証をするものとされる秩序の確立を巡る話を考察する。そこでは記紀神話の空間を構成する各世界の統治の確定プロセスを語る話と男女間の秩序に深く関わる結婚の話を中心とした。研究の枠組みにしたテーマより物語上で下位レベルのテーマが入るが、その分析を今後の課題にする。

第3章では、原始・古代の日本社会における性別役割分担を検討した。特に男と女の仕事の分業、婚姻および信仰の形態について考察を行った。縄文時代の社会と弥生社会における女性の地位を比較した結果、採集・狩猟文化前者と異なり、土に力を掛けて食料を生産するようになった社会では女性の地位は低くなることを考えると、自然への依存および大地のイメージと女性の社会的な地位の間には相関性があると示唆する。

第4章では神の誕生と出産を巡る話の検討を行った。

記紀においてはくむ>神とくなれる>神があり、うむ神は夫婦神によって、なれる神は単独で男神によって、または単独で女神によって生成させられる。記紀神話におけるくなれる>神の誕生エピソードの分析結果、出産は女神の身体との直接的関係から、すなわち女神の身体から生まれるか生成するが、男神の身体とは間接的な関係となる。出産とは女神だけ、または男神だけの体験となることがある。しかし、出産方法上、性別軸で「生む」と「作る」という違いが見出せる。つまり、出産は、女性の身体の体験として強調されていた一方、男神が神を生成される話では、男神は、女神と異なり、自分の体から産むのではなく、液体やその他の物体によって子を産む、すなわち「産む」のではなく「作る」のである。

くむ>エピソードの分析の結果、大地母神の神格を受け継いだイザナミノ命から豊玉比売の話に至って、神話は能動的に生を与える女神という母系的な概念から、男のために子を産む女神という父系的な概念への発達が見られることが分かった。出産の話の分析はテキスト全体で父権社会の概念が設定されていることを明らかにした。一方、出産の領域ないし出産の場は女性の権力領域であるという概念が記紀時代まで受け継がれてきたことが、出産の場、産屋の分析によって明らかになった。

第5章では、農耕・食物の起源についての話の分析を行い、以下の結論に至った。

記紀に収録された農耕起源神話において、女神に関しては①食物・食材の起源、②作物支配者、さらに③稲霊に先駆ける巫女という三のイメージを見いだすことができた。男神に関しては①食物を求めて獲得する人間および②稲穂という二つのイメージがみられた。それらのイメージのテキスト上の位置づけおよび変遷は次のようである。国土を生む女神から国土そのものである女神へ、次に、土を象徴する女神とともに耕地を開墾する人間を象徴する男神か

ら稲穂を象徴する男神へといったように女神・男神のイメージは変遷を見せる。その変遷は農耕の発展と密接な関係があり、その農耕の本質を反映するということが考えられる。国土そのものを生み出す女神（イザナミノ命）および国土そのもの（国）である女神（オホグツヒメ）の概念は縄文時代に生み出された概念の継承であり、稲穂を象徴する男神（ホノニギノ命）の概念は弥生時代に発生した可能性があると思われる。

第6章で宇宙の秩序形成を巡る話、第7章では社会の秩序形成を巡る話の考察を行い、次の事が明らかになった。

宇宙秩序の形成には男神並びに女神が主役を演じることがある。さらに、国の統治者にもなる。神話的空間を形成する国の割り当ての観察から、女神は最上（高天原）と下層（黄泉国）に連想付けられていることが分かる。その一方男神は現世の統治者で、現世における秩序の形成、即ち社会秩序の形成においてもっぱら主役を演じる。つまり、宇宙秩序の確立から社会秩序の確立への過程では女神が権力の領域から押し出されつつあることが明らかになった。

他国をおさめること、つまり国を統治する権利に関する決定が、男神と男神の間で行われる場合、実際の競争（力比べ）の形で説明されているのに対し、男神と女神の場合は、力比べにならず、子産みの形か結婚の形をとる。

各国の統治者と成った神の神格は、統治者となった神として、大地母神的な女神（イザナミノ命）、統治者として生まれた神（女神のアマテラス大御神と男神のニギノ命）とシャーマン的な神格を持つ神（女神のアマテラス大御神と二柱の男神ササノヲノ命と大國主神）が挙げられる。

主な結論

記紀神話には、混沌から、最初天皇である神武天皇の誕生で表現されたとも言える最高秩序の確定という、編集の目的に起因した構造が見られるが、その構造は編集過程の特徴で説明することができる。それ以外にそれぞれのテーマごとに一貫した発展が見られる。

神の誕生については、神が単独で現れることから、女神の体から産屋で、男神のものとして生まれるに至るまで、また食物起源については、地母神的な概念を受け継いだ女神の体や排泄物からの発生から男神の稲穂まで、というようにテーマの発展が見られた。さらに、結婚の話には、結婚の承諾を発言するイザナミノ命の話から父親に譲渡されるコノサクヤヒメと豊玉比賣の話へのテーマの発達が見られる。

マセ（1989）が明らかにしたように、秩序の話では、世界秩序の確立から社会秩序の確立へと展開する。それに加えて、女神の権力は高天原のアマテラスにはあるが、社会秩序の確立は男神の競争であるということが分かった。

構造は『古事記』において、神話コーパスのレベルではなく、テーマのレベルで見られると考える。

神話に課せられる課題の実行においては、次のような性別の違いが認められる。女神は、出産の話では「生む」もの、食物起源の話では土地や食物の起源、宇宙の形成の話では憑依される巫女、社会秩序の話では獲得された国の象徴、結婚の話では譲渡される姫であり、それに対して、男神は、出産の話では「作る」もの、食物起源の話では開墾する人間あるいは動く稲穂、宇宙の形成の話では脱魂型のシャーマンあるいは出生だけに条件付けられた権力を持つ統治者、社会秩序の話では獲得された国の象徴、結婚の話では求婚者として登場する。以上のように男性の活発性および女性の身体性の強調が神話において一貫してみられることが明らかになった。

論文審査の結果の要旨

本論文『記紀神話における男神と女神の性別役割—物事の起源と秩序の形成を巡って—』は、神のみが登場する『古事記』上巻、及びそれに対応する神話が収録された『日本書紀』神代上を対象とし、そこにおいて男女それぞれに連想づけられている役割と概念を考察したうえで、記紀神話における男女の権力関係とそれを維持する要素を解明しようと試みたものである。

対象とするテキストは、複数の要素が絡まり合っているため、それを分析するための方法論として、レヴィ＝ストロースの構造主義分析理論を批判的に修正したJ.-P. ヴェルナンの三段階アプローチを援用している。すなわち、第一に神話を最小単位（神話素）に分解して、同じテーマを扱うストーリーにまとめ直し、第二に同じストーリーの異伝及び同様の内容をもつストーリーについて比較分析を行い、さらに第三段階では、神話から文化へという観点から、神話に反映する男女に関する概念、及びその概念と社会の発展との関連を考察している。

まず「天地開闢」から天皇の誕生まで展開する『古事記』のテーマを「物事の起源」と「秩序の確立」に大別し、前者では神の出産と食物の起源をめぐる話について、後者では各世界の統治の確定プロセスの話と結婚の話について分析を行っている。その結果、女神は出産の話では「産む」もの、食物起源の話では土地や食物の起源、宇宙の形成の話では憑依される巫女、社会秩序の話では獲得された国の象徴、結婚の話では譲渡される姫である

ことを明らかにし、他方男神については、出産の話では「作る」もの、食物起源の話では開墾する人間あるいは動く稲穂、宇宙の形成の話では脱魂型のシャーマンあるいは出生だけに条件づけられた権力をもつ統治者、社会秩序の話では国・土地・女神を獲得するもの、結婚の話では求婚者として登場するものであることを明らかにした上で、記紀神話においては男性の活発性と女性の身体性の強調が一貫して認められると結論づけている。

あわせて、女神は国土を生む女神から国土そのものである女神に、また男神については、土を象徴する女神とともに開墾する人間の象徴としての男神から稲穂を象徴する男神へと変遷を見せること、そしてこの変遷が縄文時代から弥生時代への移行と密接に関係することを例証している。また、出産については、能動的に生を与える女神という母系的な概念から、男神のために子を産む女神という父系的な概念への展開が見られること、ただし出産の場が女性の権力領域であるという概念は記紀時代まで継承されていることを説得的に論じている。さらに、神話空間では女神は最上（高天原）と最下層（黄泉国）に連想づけられているのに対し、男神は現世の統治者として社会秩序の形成においてもっぱら主役を演じること、すなわち宇宙秩序の確立から社会秩序の確立への過程で女神が権力の領域から排除されつつあることを明らかにしている。

本論文は、方法論を精緻に省察した上でジェンダーという観点から記紀神話を論じたきわめて独創的かつ豊かな内容となっている。論の構成や日本語の表現などに、やや不足する点も認められるが、本論文全体の価値を損なうものではない。以上のように、審査委員会は本論文を、博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認める。